



政治地理学の起源と地政学の盛衰

第1部 政治地理学がたどってきた道
地理学概論 I 第1週

課題

- ① 19世紀にヨーロッパで確立された「政治地理学」は「地政学」へと変容していきますが、どのような背景からどのような性格を持った知識の体系に変化していったのでしょうか。
- ② ドイツや日本の地政学は第二次世界大戦中にどのように（どこまで）戦争と関わり、どのような結末を迎え、戦後どのように評価されたのでしょうか。
- ③ 上記①と②を踏まえて、理系を中心とする大学での軍事応用研究の議論について下記のサイトを参照し、自らの意見を述べて下さい。

NHKクロースアップ現代「“軍事”と大学～岐路に立つ日本の科学者たち～」（2016年9月28日）
<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3868/1.html>

日本学術会議「軍事的安全保障研究に関する声明」（2017年3月24日）
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-s243.pdf>



課題

- ① 19世紀にヨーロッパで確立された「政治地理学」は「地政学」へと変容していきますが、どのような背景からどのような性格を持った知識の体系に変化していったのでしょうか。
- ② ドイツや日本の地政学は第二次世界大戦中にどのように（どこまで）戦争と関わり、どのような結末を迎え、戦後どのように評価されたのでしょうか。
- ③ 上記①と②を踏まえて、理系を中心とする大学での軍事応用研究の議論について下記のサイトを参照し、自らの意見を述べて下さい。

NHKクロースアップ現代「“軍事”と大学～岐路に立つ日本の科学者たち～」(2016年9月28日) <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3868/1.html>

日本学術会議「軍事的安全保障研究に関する声明」(2017年3月24日)
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-s243.pdf>



政治地理学の起源（1）

- フリードリヒ・ラッツェル（1844-1904）
 - 近代人文地理学、政治地理学の創始者
- 「国家の空間拡大の諸法則」（1886）
 - 国家が戦争を通して拡大していくことは自然の発展傾向
 - 国家の領域はその文化とともに広がり、膨張政策の最大の成功は地理的環境の利用にかかる



政治地理学の起源（2）

- *Politische Geographie* (1897)
 - 生存空間 (Lebensraum) 概念の導入
 - 諸国家は可能な限り土地、資源を獲得しようとして植民・戦争を続ける = 生存空間を求める闘争
- 19世紀の近代地理学の成立以来、地理学の一分野を形成
- 20世紀帝国主義・戦争と不可分の関係
 - 20 世紀初頭のスウェーデンやドイツにおいて地政学 (Geopolitik) へと展開



地政学への展開

- 地政学の台頭
 - 伝統的には国家の地理的位置やそれを取りまく地理的条件の理解をもとに、大国間の政治的関係、特に軍事的対立を含む外交の分析を行い、特定の国家の軍事・外交政策への応用をめざす
 - 兵要地誌（兵站情報）
- 政治地理学＝国家の空間的動態を研究→地理学の「政治」への応用

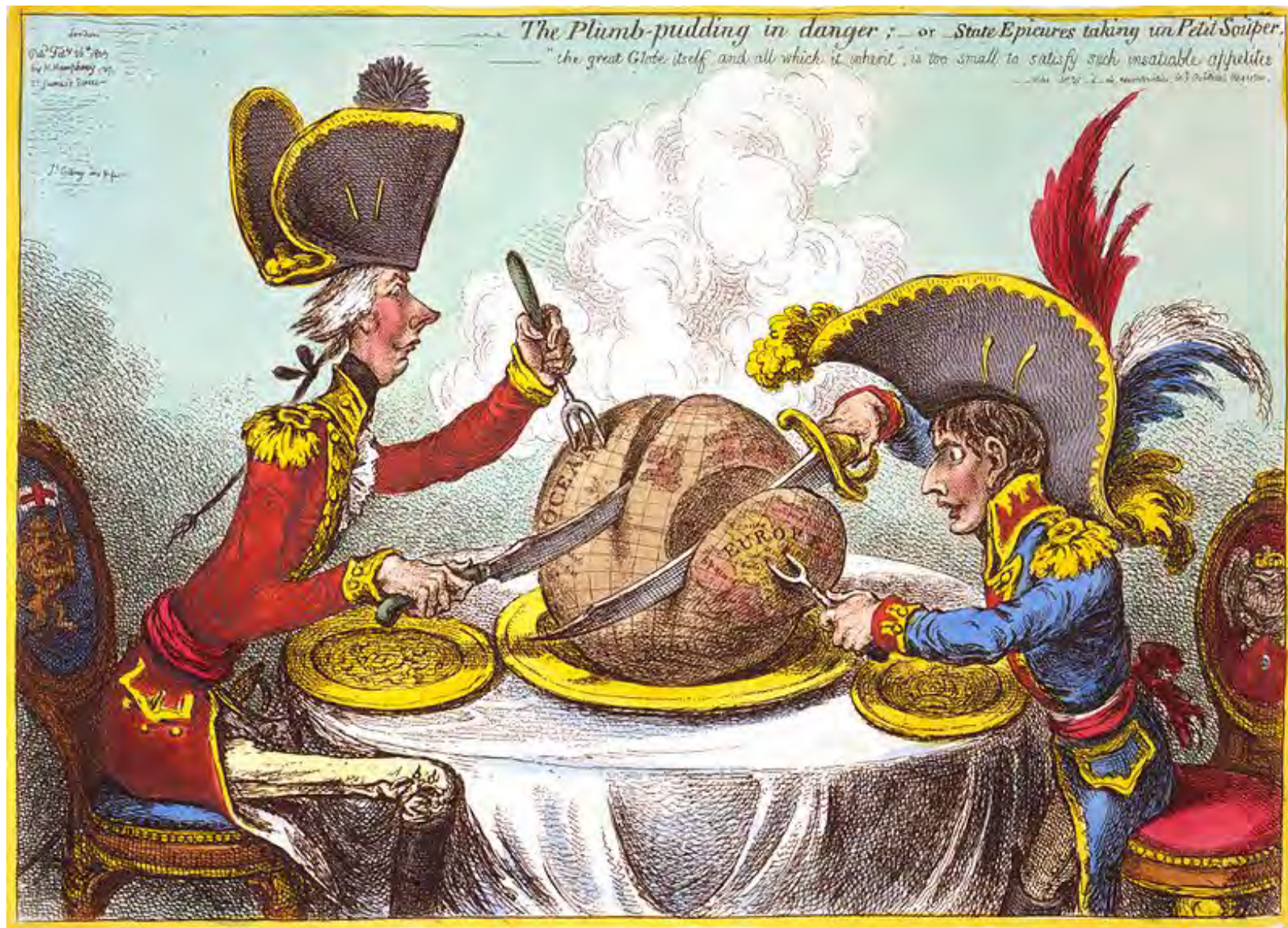


歴史的背景

- 帝国主義（植民地主義）の展開
 - ある国が他の国を政治的（公式）もしくは経済的（非公式）に支配するプロセス（行為や仕組み）
 - 1960年の国連決議において国連憲章に反するものされる。



仏・英による世界の分割（1805年）

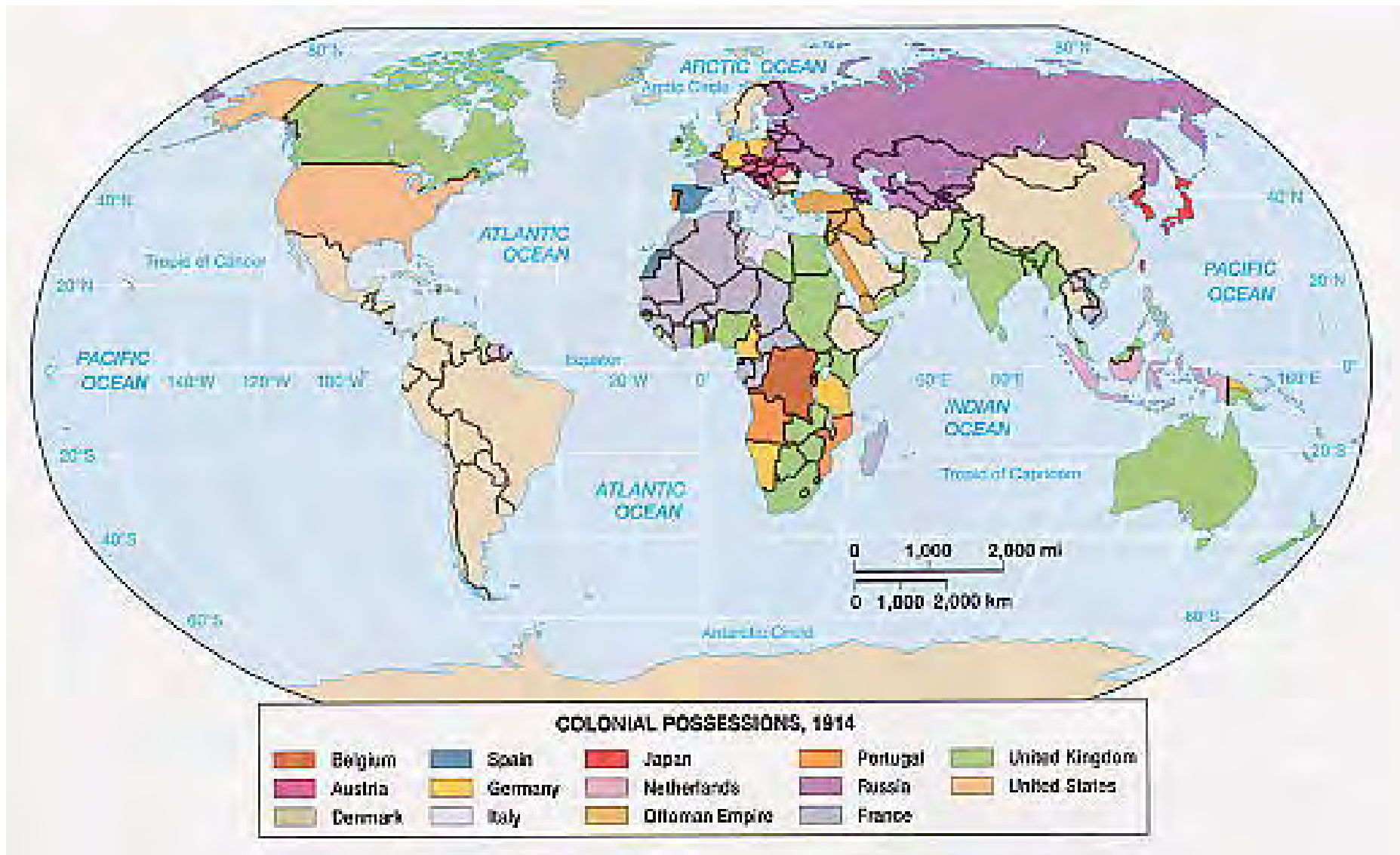


帝国主義勢力の対立

- **第一次世界大戦**（1914～18年）
 - ヨーロッパ列国間の戦争が世界に拡大（独・墺が英・仏・露に対抗）
- **第二次世界大戦**（1939～45年）
 - 人類最悪の戦争。独・伊・日（後発帝国主義国家）対英・仏・露・米・中。



世界の植民地（1914年）



20世紀前半の地理学の「貢献」

- 軍事的戦略に必要な情報を提供
 - 兵要地誌（地形、交通、物資＝戦術・兵站術への地理学の応用）
- 軍事的行動を支える理論を提供
 - 地政学（戦争・現実主義的外交の学問的正当化）



地政学者の「活躍」

- 三名の地政学者
 - ハルフォード・マッキンダー（英）
 - カール・ハウスホーファー（独）
 - 小牧実繁（日）



- それぞれの国益を背景に世界秩序のモデルを構想



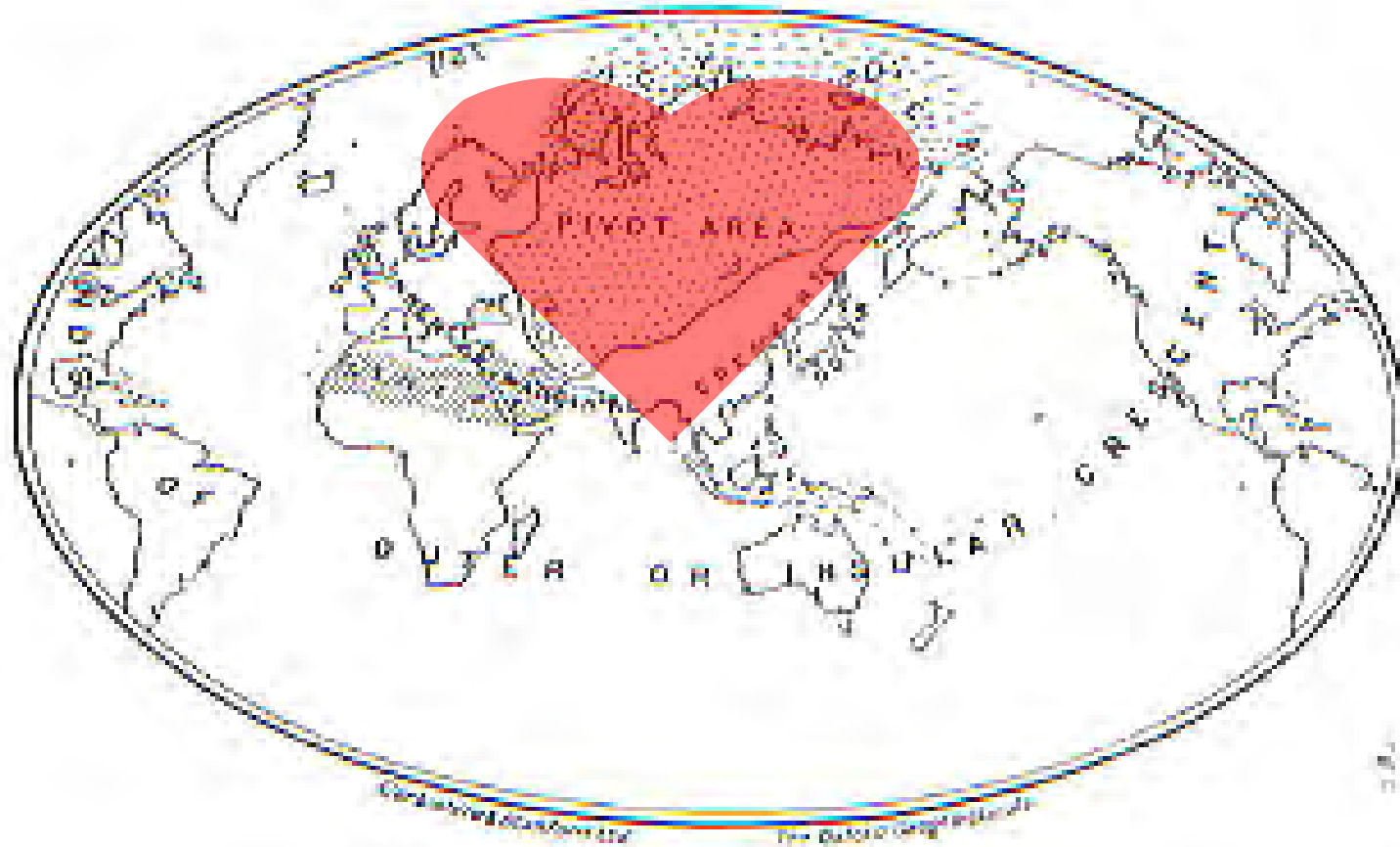
ハルフォード・マッキンダー（1861-1947年）

- イギリスの探検家、地理学者にして政治家
- ドイツ地政学はじめ後の戦略論に大きな影響
- **ハートランド理論** = ドイツへの警戒とイギリス凋落への焦り

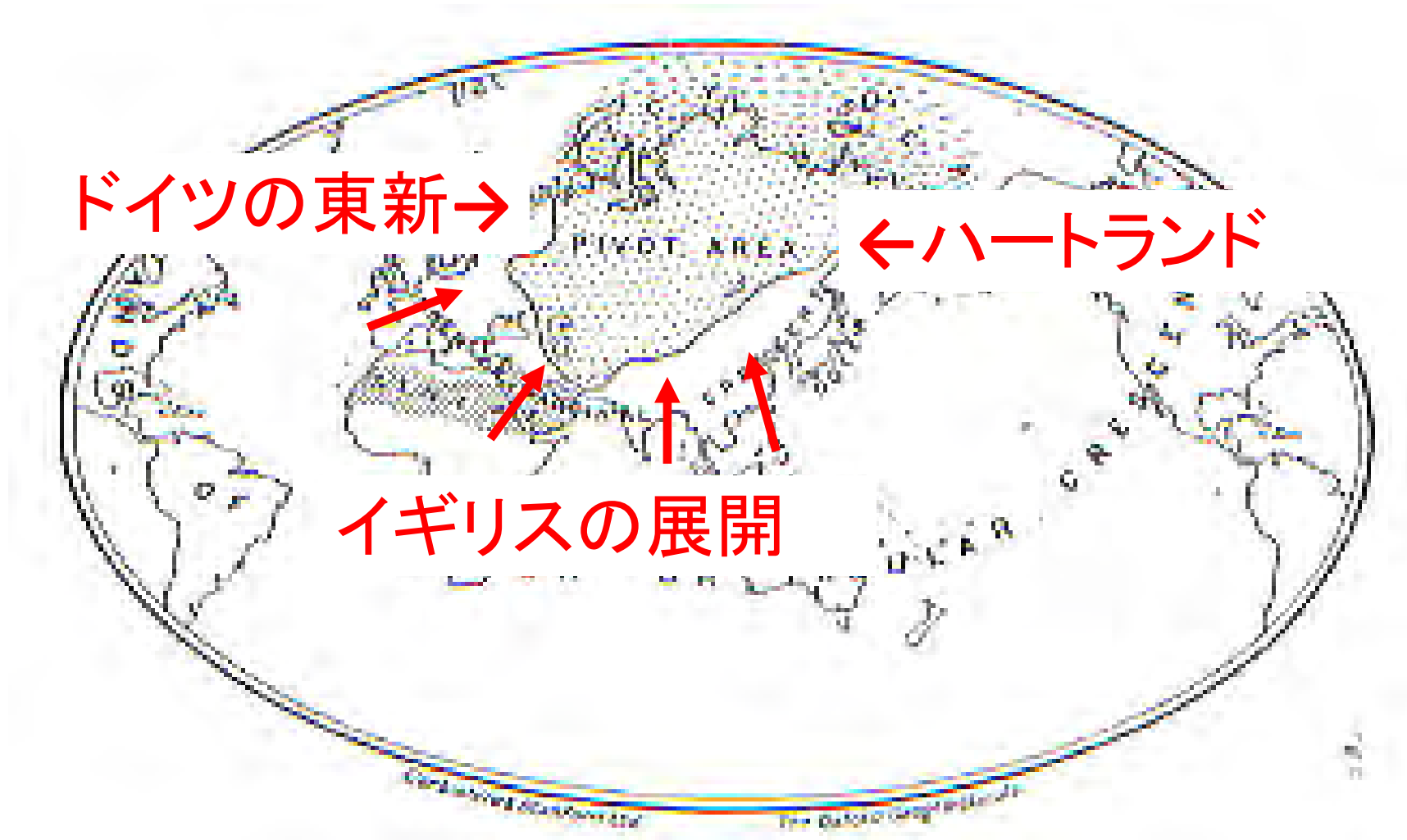


ハートランド理論 (1919年)

東ヨーロッパを制するものは、ハートランドを制し、ハートランドを制する者はワールドアイランドを制し、ワールドアイランドを制するものは世界を制する。



ユーラシア大陸内陸部とそれを取りまく 諸大陸・海洋の配置



ハートランド理論の前提と限界

- 陸上輸送（鉄道）を戦略上重視
←航空機の発達を予測できず
- ドイツ（or ロシア）の世界制覇を警戒
←アメリカや日本を評価せず
- 大陸上の位置が政治を決定する
←地理的決定論



課題

- ① 19世紀にヨーロッパで確立された「政治地理学」は「地政学」へと変容していきますが、どのような背景からどのような性格を持った知識の体系に変化していったのでしょうか。
- ② ドイツや日本の地政学は第二次世界大戦中にどのように（どこまで）戦争と関わり、どのような結末を迎え、戦後どのように評価されたのでしょうか。
- ③ 上記①と②を踏まえて、理系を中心とする大学での軍事応用研究の議論について下記のサイトを参照し、自らの意見を述べて下さい。

NHKクロースアップ現代「“軍事”と大学～岐路に立つ日本の科学者たち～」(2016年9月28日) <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3868/1.html>

日本学術会議「軍事的安全保障研究に関する声明」(2017年3月24日)
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-s243.pdf>

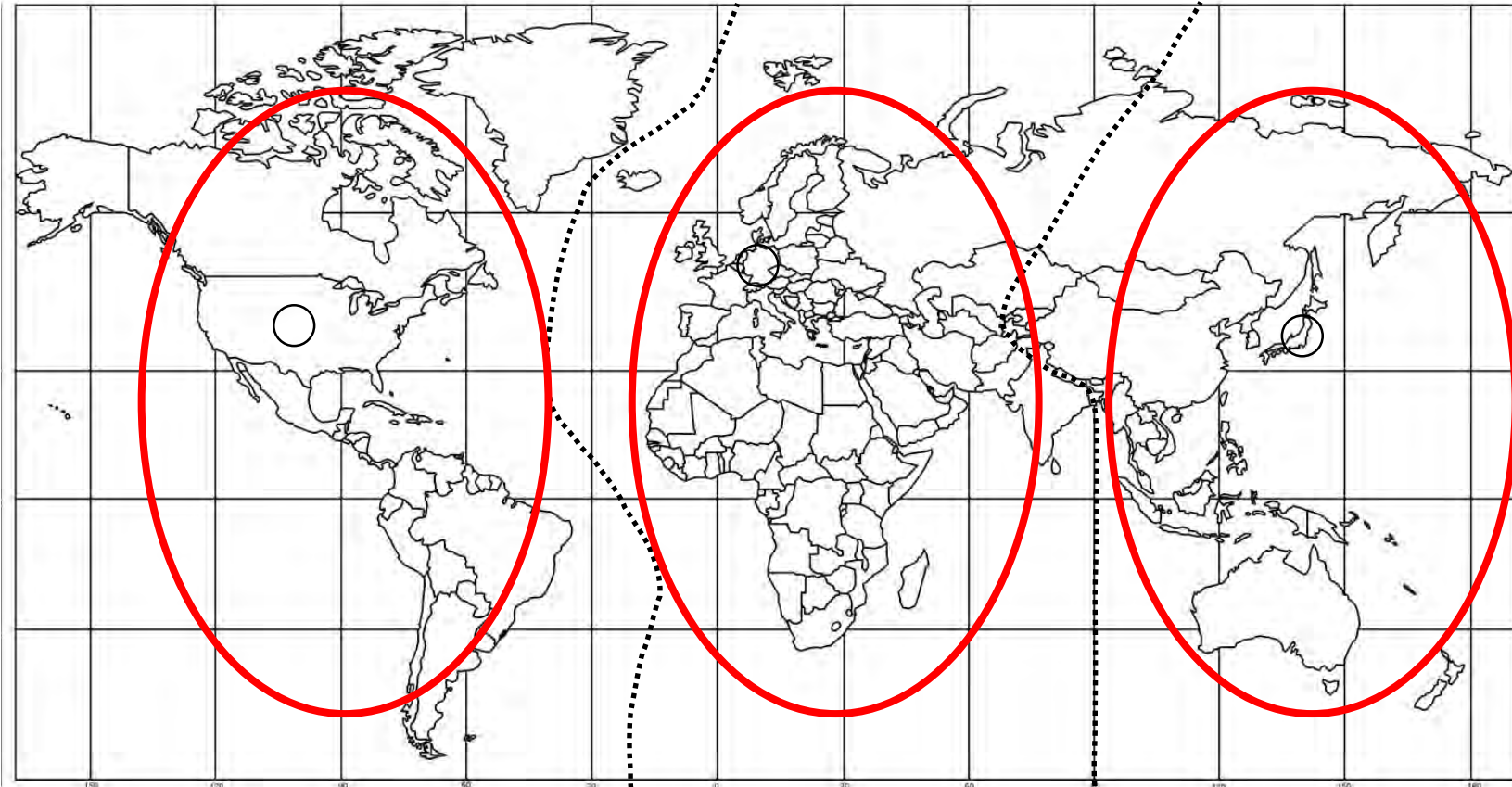


カール・ハウスホーファー（1869-1946年）

- ドイツ軍人（もと駐日武官）、地理・地政学者
- 第一次大戦敗戦国ドイツでの地政学の確立
- ナチスとの関わりが誇張される
- 悲劇的最後



パン・リージョン = 大国の棲み分け



パン・アメリカ

オイラ・アフリカ

パン・アジア



ブロック型世界秩序の構想

- 世界政治をどう安定化させるか
- 世界を三つの南北縦断型地域に分割
 - 米を核 = パンアメリカ
 - ドイツを核 = オイラフリカ
 - 日本を核 = パンアジア
- 各地域が経済的に自給できる
→ 大国間の紛争を空間的に解決
- ナチスの外交政策から次第に距離
- 戦犯として起訴されずも妻と自殺



日本の地政学

- 岡田俊裕『地理学史』古今書院、2002年より
- 地理学者
 - 研究の自由を奪われた被害者
 - 研究や調査をとおして侵略戦争に加担した加害者
 - 「大東亜」地域調査の成果獲得



小牧実繁（1898-1990年）

- 小川琢治（京都帝大地理学教室初代教授）に師事、一世代下
- 京都帝国大学地理学教室教授
 - 専門は歴史地理学
- 教授就任（1938年）に相前後して「**日本地政学**」提唱



総合地理研究会（吉田の会）

- 1937年ごろ結成、大学近辺に借家
- 陸軍外郭団体の資金援助を受け、京都帝国大学地理学教室のOBを組織して、地政学研究
- メンバーは京都帝国大学はじめ関西主要私立大学教員
- 世界各地域を分担し関係文献を収集、地政学的な地誌研究を行なう



小牧の「日本地政学」（1）

- ヨーロッパ諸国により世界は歪曲されている
- 学問もヨーロッパ中心の世界秩序維持に貢献
- 日本独自の地政学提唱
←西洋に対抗する「京都学派」の影響
- 日本地政学 = 新世界秩序形成に必要

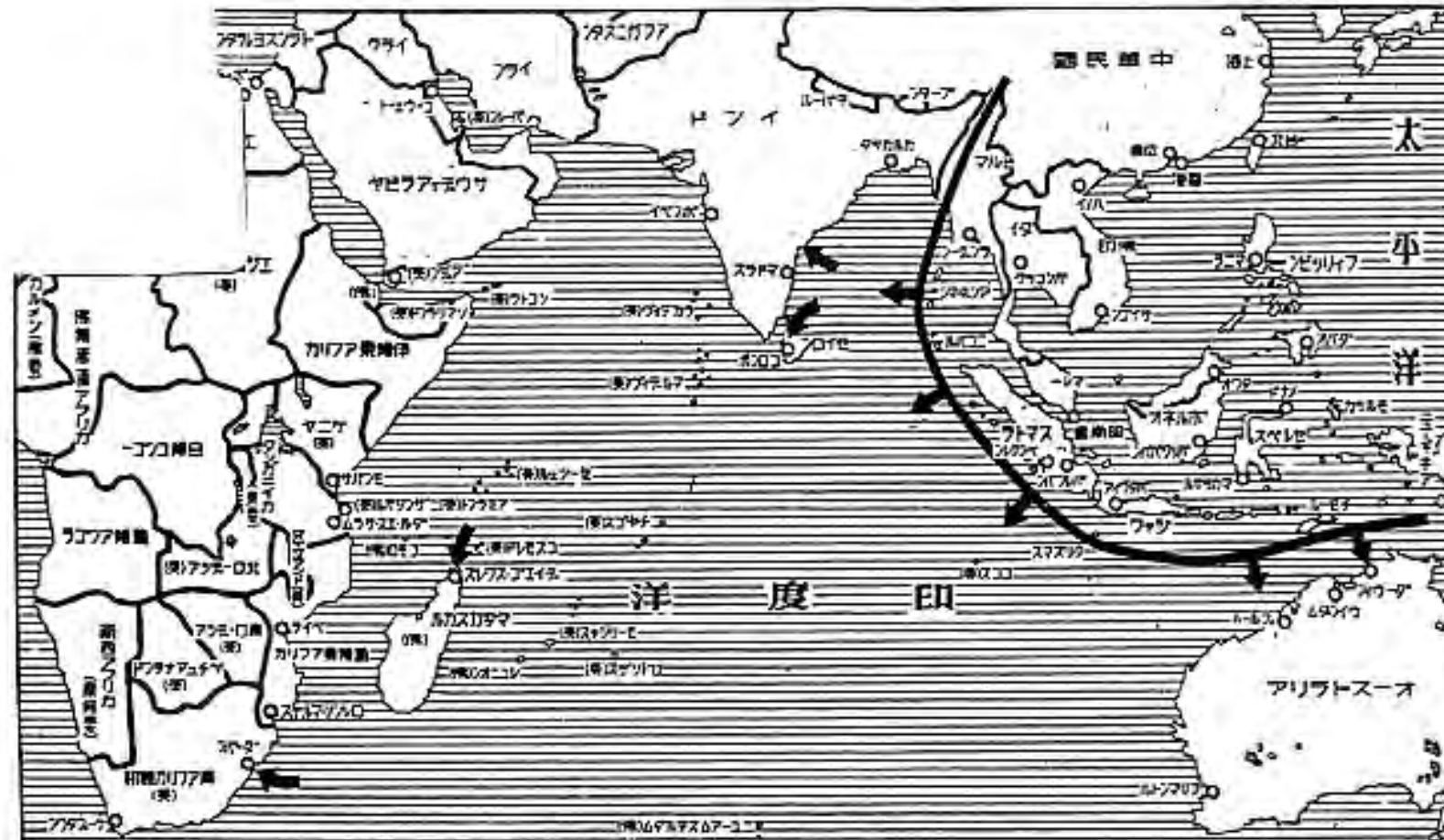


小牧の「日本地政学」（2）

- 強権的ドイツ地政学に対抗
- 「皇道」（天皇の実践する神道）を指導理念
←実証性に乏しい
- 東亜、大東亜を超えて「世界新秩序」へ
= 日本の世界展開（インド洋から東アフリカへ）
- 吉田の会は敗戦直前まで活動、戦後小牧はじめ京都帝国大学地理学教室
教員は相次いで辞職



南方からの世界展開



史料 51 印度洋要図 (矢印は日本軍の進撃を示す)

浅井徳一『印度洋』(朝日新聞社 1942 年刊)による。小牧実繁は、これと同じ図を自著『世界新秩序建設と地政学』に典拠を示さず引用している。



地政学（者）の「挫折」

- 地理学を時局と国策に応用することに執着
＝世界情勢を冷静かつ批判的に考察する力を失う
- 状況的限界、結果は衰退や敗戦
- 自国の戦略・支配下におかれる人々に対する意識（加害者意識）の欠如
- 「無責任」な責任のとり方
→辞職、公職追放、過去に触れず



課題

- ① 19世紀にヨーロッパで確立された「政治地理学」は「地政学」へと変容していきますが、どのような背景からどのような性格を持った知識の体系に変化していったのでしょうか。
- ② ドイツや日本の地政学は第二次世界大戦中にどのように（どこまで）戦争と関わり、どのような結末を迎え、戦後どのように評価されたのでしょうか。
- ③ 上記①と②を踏まえて、理系を中心とする大学での軍事応用研究の議論について下記のサイトを参照し、自らの意見を述べて下さい。

N H K クローズアップ現代「“軍事”と大学～岐路に立つ日本の科学者たち～」(2016年9月28日) <http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3868/1.html>

日本学術会議「軍事的安全保障研究に関する声明」(2017年3月24日)
<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-s243.pdf>

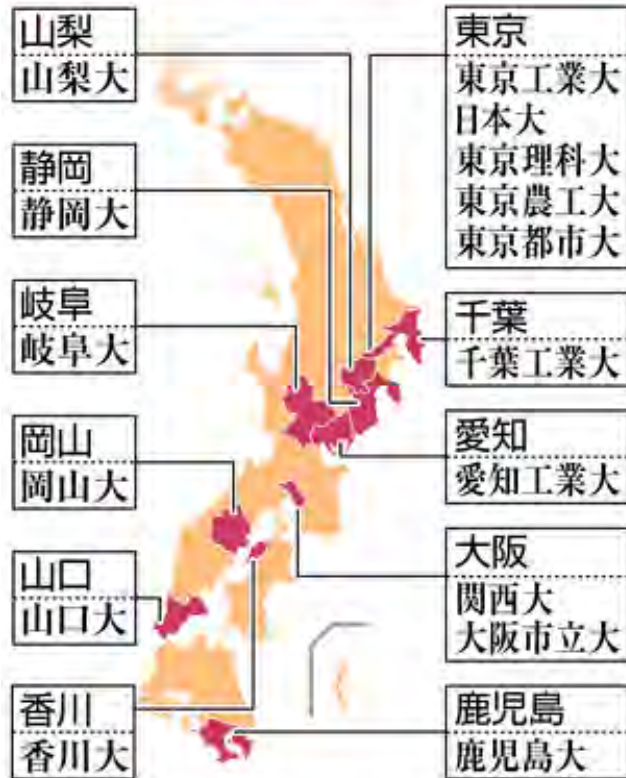


近年の地政学評価

- 大衆的な「地政学」ブーム
- 防衛省による安全保障技術推進制度創設（2015年～）
- 学術的にも再評価・検討する動き
 - 戦後の批判的流れが顧みられない
 - 『現代地政学事典』（丸善出版）刊行→地政学の現在地点
- 第1部の討論のテーマに



防衛省の研究公募に 応募した16大学



共同通信 2015年9月24日
<http://www.47news.jp/47topics/e/269327.php>

軍事可能研究に16大学応募 東工大や岡山大 防衛省が費用支給

小型無人機やサイバー攻撃対策など軍事技術への応用が可能な基礎研究に研究費を支給する防衛省の初の公募に、東京工業大や岡山大など少なくとも16大学が応募したことが22日、分かった。共同通信が理工学、医学部門を持つほぼ全ての国立大と主な公立、私立大、計93大学を対象にアンケートした。

国内の大学は太平洋戦争に協力した反省から、長らく軍事研究から距離を置いてきたが、公募は民生用にも使える基礎研究に限定し、成果の公開を原則としたことから一定数の応募があったとみられる。一方で専門家からは「軍学共同研究」が歯止めなく広がり、学問の自由が脅かされる懸念を指摘する声も出ている。

